



日本一低い谷中分水界のあるまち

# 生郷

第56号 2026. 2.20  
発行 生郷自治振興会  
Tel/Fax 0795-82-2666  
URL <https://ikusato-js.com>



## 「新年度に向けて」

午年の新年を迎えてから早二カ月が過ぎようとしていきます。生郷地域の十一自治会も年度の終盤となり、自治会運営・活動に多忙な日々を送られていることと拝察します。

生郷地域十一自治会では、地域の環境整備・地域活性化を目指すイベントや活動・支えあう福祉の取り組み・地区内の開発事業等々、さらなる自治会住民の安心安全な生活を目標として、年度末の総括と新たな課題や引継ぎ事項の取りまとめをされていることと思えます。振興会でも

例年四月下旬に開催する定期総会を経て、生郷地域全体の地域づくりに努めてきました。毎月定例で開催する理事会を中心に協議検討しながら、地域の特徴あるイベント開催や生郷地域内外(特に対市)の課題解決に取り組みを進めてきました。

最近の人口減少や高齢化また働き方改革によって高齢就業継続などのために、地域では運営上の人材不足や例年の行事が実行できないといった切実な問題が起っています。

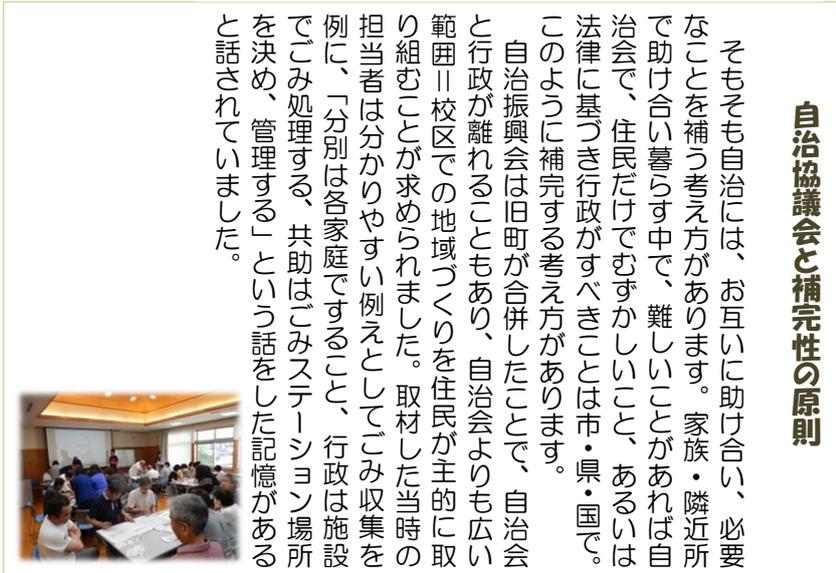
自治会では役員を選考や年間行事等の計画段階でその現状が毎年浮き彫りになります。人口減少や高齢化は今後もさらに進み、気候変動などの自然現象の影響や多様な暮らし方・働き方が社会の日常になってきています。今こそそこに住んでいる住民みんなが主体的に関わり合う地域づくりが大切です。ここでいう「関わり合う」は役員や主催者の立場ではなく、住民一人ひとりが話し合いや催しに参加することからはじまります。平たく言えば関心を持ってもらうことと言えます。さらに自治会や振興会は組織としての役割を考え、連携と協働を強化することも大切です。

### 自治協議会と補完性の原則

そもそも自治には、お互いに助け合い、必要なことを補う考え方があります。家族・隣近所で助け合い暮らす中で、難しいことがあれば自治会で、住民だけでむずかしいこと、あるいは法律に基づき行政がすべきことは市・県・国で。このように補完する考え方があります。

自治振興会は旧町が合併したことで、自治会と行政が離れることもあり、自治会よりも広い範囲(校区)での地域づくりを住民が主的に取り組むことが求められました。取材した当時の担当者は分かりやすい例えとして「ごみ収集を例に、分別は各家庭ですること、行政は施設でごみ処理する、共助はごみステーション場所を決め、管理する」という話をした記憶があると話されていました。

まちづくりを応援する情報誌「tamtam」vol.31 より



### 冬季生郷塾 書初めを仕上げる

今季の生郷塾は三日間だけでしたが、毎日平均四十名の子どもたちが自分で用意した課題学習に取り組みました。地域のボランティアの方にサポートしてもらいながら学習を進めていきました。年明けの五日には、各学年の書初め課題に取り組んでいる姿はみんな真剣でした。



## 生郷地域ハイキング

今回で第四弾となる「生郷地域ハイキング」は十一月一日(土)に北野地区周辺で行いました。毎回、生郷交流会館を出発し地域の自然・歴史・生活とふれながらハイキングして交流会館に帰ってきます。

「古墳時代の人々はどんな生活をしていたの」「何人ぐらいで住んでいたの」「なぜ古墳がたくさんあるの」

北野自治会の地区内には、一号墳である親王塚をはじめ一〇基以上の古墳が確認されています。大半が山すその木々に囲まれた位置にあります。が、住宅の庭先にも大きな岩を積み重ねた古墳が点在します。まさに「古墳の里」です。

長い年月を経て、盗掘や自然災害にもたびたびあって荒れ果てていました。が、昨年丹波市教育委員会の調査を兼ねた周辺の整備活動がはじまり、千五百年以上前の生郷の地の成り立ちや生活の様子が少しずつ明らかに近づいてきます。

生郷地域ハイキングは当日は三十三名の参加があり、教育委員会文化財課の西岡学芸員と長年丹波の古墳を調査研究されている東昭吾氏の解説と指導のもと、体験学習として重なる土にうず



もれた古墳周辺を参加者全員で整備しました。西岡学芸員は古墳の石積み内外多方向から写真を撮り、360度画像に加工されます。リアルに立体化された古墳の360度画像を見ると簡単に疑似体験でき、当時の人の営みが思い浮かびます。また古墳が点在する森の中を歩いていると、不思議と車の音や明るい光が遠のいてしまいくらいでした。長年にわたり古墳の調査活動をされている東氏が、山肌を歩きながらも親指の爪ほどの小さな土器片を見つけたら驚きでした。

参加者全員の活動では、小さなスコップで掘り出した土もレーキでかき集めた土も何百年もの年月を経て今に至るんだなあと思うと感慨深い口マンを感じました。



古墳の里



1/29

### 第三回生郷まつり準備委員会

次年度七月の第四十回生郷まつり実施に向けて協議検討しました。今回は駐車場及びシャトルバスの運航・花火の打上げを含むまつり全体の実施内容(プログラム等)について協議しました。



「いっしょに行こう！  
〇〇さん もう行っちゃったん？」

こんな日常のおさそい会話からもじって付けられたコミュニティカフェ「いっ茶丹」

毎月第二日曜日の交流会館はテーブルを囲んで和やかな話が飛び交っています。ボランティアでお世話になっている皆さんの手作りのスイーツやお菓子も毎月メニューが変わって大好評です。さらに午前十時オープンを早くから心待ちにされているのが、会館の軒先を利用した生郷シユシユマルシェです。新鮮

な野菜やとれたての果物など安価で売られています。このマルシェへの出店については生郷地域の方ならごなだでも出店できますが、昨年十二月から出店申し合わせ事項がいくつか整理されましたので、今後出店を希望される方は振興会事務局にお問い合わせください。



11/9 マンドリンクラブ クローバ



1/11 オカリナサークル ひびき



2/7  
ひな人形づくり



11/28

令和七年度第二回  
生郷地域支えあい推進会議

前回までの推進会議で、ご近所さんが支えあう社会を作ることの大切さが明らかにされました。しかし、その基盤であるつながりは益々希薄になる一方です。地域や自治会でどんな取り組みを進めなければならぬか。どんな地域をつくっていくべきか。昨年から各自治会の取り組みを紹介しあい、地域支えあい推進の課題を共有しています。今回は新町自治会・南町自治会・北野自治会に取り組みの一端を発表いただき、支えあい推進について協議しました。

- ・ 民生委員等と自治会の連携を密にとり、声掛けや見守りなど支えあいの活動を広げる。
- ・ 住んでいる自治会に関心を持ちよく知ることから地域を活性化する。
- ・ 百歳体操など住民が集まる機会をつくる。



守れ！ 自転車走行ルール

今一度、自転車走行のルールを再確認して

安全運転を！

四月一日より危険自転車走行の罰則規定が十六歳以上に適用されます



# 生郷今昔さんぽ

## 生郷の歴史と「水」

かつて小学校の地域学習で「水」をテーマに地域を学習した。「水」は、自然体系は勿論のこと地形の成り立ちや気象・大気等の現象にも大きく影響します。また、海・河川へのつながりをたどると人々の生活やあらゆる産業には、「水」なしでは成り立たないことは明らかです。地域を流れる河川では、そこに住む住民の生活や文化・歴史にも学びのフィールドは広がります。

今、水上回廊水分れフィールドミュージアムでは、「丹波の生活と川」と題して企画展が催されていますが、前回、広報誌「生郷」五十五号で掲載した「舟座のこと」「三つの池をめぐる」にも「水」の存在が大きくかかわっています。

私たちが住む生郷は、「水」の影響が歴史をつないできたと言っても過言ではない。地域の自然環境や産業の発展・人の生活に水の利用は欠かせないが、「水」が及ぼす災害や人々の死活問題にも発展した水争いが生郷の歴史にも負の影響として残っている。分水嶺（向山）から下る高谷川は低地に広がる扇状地をつくり、源流から瀬戸内海まで九十数キロを流れる加古川は田畑を潤してきたが、反面長い歴史の中では幾度となく生郷の地を破壊しそうな水害を起こしている。特に律令制度が発足し古くから条里制がしかれた稲継・本郷・市辺・横田の集落に囲まれた地は、長年「水」との戦いでした。



今から約四百年前、民と共に水と戦い、困窮としたこの地の村人たちを守りたい一心で生涯を閉じた人がいた。

以下は昭和三十年五月五日に発行された広報誌「いくさ」とに書かれたものを再掲する。

### 意春坊さん

天正七年五月十二日、織田の軍勢が但馬と播州の両方面から破竹の勢いで侵入してきた。この猛攻によって玉巻・山垣など郡内にあった二十余りの城砦もわずかず数日の間に陥落し、最早これまでと覚悟した波多野主殿守宗長は、手勢を集めて霧山に立て籠った。

市辺と水上の間にある標高三百米余りの霧山は、山頂に高畑と呼ばれる平地を持ち、山肌は急傾斜で郡東・西部が一望できる要害ではあるが、五月二十八日の夕刻には横田・市辺から水上・多田野・油良あたりまで羽柴秀長や丹羽長秀の率いる九千余の軍勢がひしひしとつめかけたのである。その奇手の軍勢の中からただ一人、霧山に上り宗長に案内を乞うたのは、羽柴秀長の使者 堀尾茂助吉晴であった。宗長は、「ともあれ会おう」と囲幕の中へ使者を通し、使いの趣はと尋ねると、「かねて丹波衆は鬼とも言われ、勇敢とは聞き及んでおりましたが、この度初めて御手合せ願ひさすはと皆感じ入り、お噂高うございます。」と堀尾吉晴は礼を厚く、赤井方の善戦を讃え懇懇に降伏を説いた。この若い使者はとつとつとしていたが、一生懸命に誠意を伝えようとする心は宗長にもよくわかったが、宗長の覚悟は変わらなかった。

「ご厚志はかたじけないが、やはり武士らしく潔く討ち死にいたす所存じゃ」と降伏しようとはせず、吉晴も宗長の覚悟に感心して押しつけては勧めず引き下がろうとした時、宗長は一人の幼児を連れて来て、

「これは播州三木城のゆかりの者でござるが、故あって預かり育てし者なれど、幼き命 縮めるも哀れ故、貴殿の袖に託したい。」とその幼児を吉晴に託して山を下らしたのである。

かくて、翌二十九日山すそに待ち構えていた織田軍の総攻撃が開始され随所に激戦が展開されたが、赤井軍はあえて防ごうとはせず、切っ出て華々しく宗長以下こことく討ち死にしたのである。

藤原秀郷以来十九世、丹波の名門波多野氏はこうして亡び去ったが、それから二十二年後の慶長六年（一六〇二）

二万五千石の大名として北油良に封ぜられた別所豊後守吉治こそ、過ぐる霧山の戦いに堀尾茂助に抱かれて、ただ一人命ながらえた当時二歳の幼児の成長した姿であった。

別所吉治は北油良に封ぜられると、播州の南陽山観音寺（三木城主別所氏の菩提寺）の住職意春を招き、霧山の戦で散った波多野宗長をはじめ多くの戦死者の霊を慰めるために経塚を造らせたのが、今市辺の二宮神社境内に残る一字一石三間四方の法華経の経塚である。

意春は数年の歳月をかけて、元和元年（一六一五）十一月ついにこの経塚を完成させたが、その間には年々洪水に見舞われる氷間下（市辺）付近の治水にも力を注ぎ、現在の市辺の内堤防（霞堤）の基をつくったり、開田に尽力するなど農業の発展に寄与した。また横田・市辺間の十六町と呼ばれる道路も意春の進言によって別所吉治が修築した物であると伝えられるように、市辺の農民たちにとっては大恩人であり、「意春坊さん、いしんぼさん」と慕われ尊敬されていたが、寛永十九年（一六四二）二月はじめ、霧山の山麓に自分の墓穴を掘ってもらい、「この中から鐘の音が聞こえなくなったら、わしは死んだものと思ってくれ、わしは死んでもこの村の水難火難・はやり病から皆を守る」と言い残して、一切の飲食を断ち生きながら穴に入ったのである。そうして数日は意春のふる鐘の音が聞こえたが二月五日にはその音も絶えた。今もその旧暦二月五日を命日とし、毎年欠かさず意春祭が催されている。

1/29

### うすと杵で餅つき体験

東小三年生を対象にした振興会主催の恒例行事。もち米から餅ができるまでの工程を学び、八臼をつき上げた。慣れない杵の振り下ろしに、取り囲むみんなが一斉に大きな掛け声。石うすで挽いたきな粉をつけたつきだての餅は最高においしかった。

